

名古屋大学

実施報告

(1) 実施責任者報告

名古屋大学学生部長 伊藤忠士
(公開講座委員会委員長)

1. 放送公開講座の大学における位置づけと放送局その他の関係機関との協力関係について

名古屋大学の「放送利用の大学公開講座」は、従来(昭和44年)から公開講座を実施してきた公開講座委員会において検討を進め、「大学の社会的使命にもとづいた良識によって、本学が主体的に学内で行われている独自の研究教育の成果を地域社会に公開すること。」を目的として昭和60年度からテレビ放送公開講座を、昭和61年度からはラジオによる放送公開講座をも実施してきている。

本学では、放送公開講座を実施するため、公開講座委員会の下にテレビ講座については専門委員会を、ラジオについては実施部局である教育学部に小委員会を設置して検討をした。

放送局側との打合せについては、実施責任者と主に専門委員会(小委員会を含む)があたり、同委員会に数回出席を求め、テキストの作成方法、PR内容、収録の手順等詳細な打合せを行った。

2. テーマの選択とそのねらいについて

1) テレビ放送公開講座について

テーマ：ミクロの科学と人間生活

宇宙、天体を眺めることから出発したガリレオの望遠鏡は、一方では顕微鏡という形で、小さな物体を観察する方向へも進み、ミクロの世界を次々と明らかにしてきた。人類への最初の貢献は病源となる微生物への探究であり挑戦であった。一方、生体を構成する細胞の構造が調べられ、内部の微細な構成要素に至るまで、形態的な面のみでなく、機能的なしくみの解明が行われつつある。細胞によって構成される個体は、生命という生物の本源的属性を内蔵し、美しい調和を保った形態を作り上げている。細胞そのものやその総和である個体は遺伝子によって継代されている。近年、遺伝子の本体を解明する道がひらかれたことにより、生命のしくみについてのわれわれの理解は飛躍的に発展した。さらに、この新しい生命科学は、バイオテクノロジーとしての応用面を広げ人類に恩恵をもたらしているが、他方で生命に対する人工的な操作は、科学と倫理という新しい問題をわれわれに提起している。

また、微細構造に分解し、目で眺めるという手段は生体以外の物質の世界においても広がり、結晶構造、分子構造などの解明がすすんだ。物質のもつ未知の性質の発見とその制御によって、

優れた機能を備えた新素材の創造と活用が次々と可能となり、エレクトロニクスにおける集積回路とその生産技術などに見られるように、ミクロの世界は技術分野にもはてしなく広がっている。

これらの技術は、われわれの日常生活の中に既に深く入りこんでおり、その生活様式まで変えようとしている。

このように、生命科学やマイクロ物質と人間生活とのかかわりは、今後一層密接になることが予想される。しかし、その効率のよさ、便利さのみに目を奪われていると、ときとして人知を越えた悲惨な結果をもたらさないとも限らない。

本講座は、関連した研究の現状を出発点として、人間生活と自然との調和のとれた高度技術の発展はどうあるべきかを考えようとするものである。

2) ラジオ放送公開講座について

テーマ：転換期の教育を考える

今日の教育は複雑な問題をかかえている。日々報じられるニュースを通して知るだけでもさまざまな局面が見えてくる。教育の範囲は広がり、激しく変化している。過去の経験に頼って今日の教育を判断しようとしても、その間のズレが大きいため、カラまわりをしてしまうようなこともある。日々のニュースは、日常の世界のなかに「競争」や「選抜」から「体罰」や「暴力」にいたる「異常な」できごとをニュースとしてもち込む。それらだけを見ていると、今日の教育は、あたかも苛々のし通しで、ドギつく、また無責任になっているとしか見えてこないだろう。それは、今日の教育のある側面を表わしていることは否めないが、それが全体であると思込むと、今日の教育の全体を見る方法も、意志も弱まってしまう。今日必要なのは、教育の全体を冷静に見抜く目であり、教育の変化のなかで見つめようとする心であろう。

3. 番組、印刷教材、学習指導の問題の関連づけについて

番組の台本作成は、テレビ・ラジオ講座ともテキストの原稿によって行うこととした。よって、番組は概ね、印刷教材に沿ったものとしたが、ことに、受講生以外のテキストのない視聴者にも十分に理解できるよう配慮も行った。また、特にテレビ講座では、受講生が、印刷教材では表現ができないもの及び映像で表現した方がより理解されやすい事柄については、番組のみによった。放送公開講座をより深く勉強しようとする受講生のために、テレビ・ラジオ講座とも印刷教材の各放送分ごとに参考文献の紹介を行った。

学習指導では、受講生にアンケート調査を実施して、放送内容でもう少し詳しく説明して欲しいことや、質問したいことなど、放送内容及び印刷教材で十分に理解できなかった部分を補足する方法で行った。

4. 番組の学習効果について（講師の印象、受講生の反応等から）

現在、テレビ・ラジオ講座ともにアンケート調査を集計・分析しており詳細については、後日明らかにしたいが、概ね次のような意見があった。

(テレビ講座)

- (1) 最新の情報が豊富に含まれており非常に有益であり、関連ある新聞記事、本等を読むようになり社会が広がった。
- (2) 写真、図、実物または実験室等での収録などを多く用いて、理解のための印象度も高まりわかり易かったとの意見であった。

(ラジオ講座)

- (1) 身近な問題に即した講座でふだんの教育に関する考え方の幅が広がり、大変に有意義であった。
- (2) Q. and A. 方式及び現場での録音等を盛り込まれており、理解がしやすかったとの意見であった。

5. 印刷教材の作成過程について

(テレビ講座)

放送公開講座内容が自然科学の多様な専門分野に亘っているため、全体の一貫性及び重複しないようにするための調整に十分な時間を費やし、また、社会科学の立場から現代科学の進歩と人間生活への影響を見ることにより一層講座の充実を計ったので、その配慮にも相当の時間を必要とした。

(ラジオ講座)

単独部局で実施するため、教育学部に公開講座小委員会を置いて、中心に講座全体の一貫性及び各テーマの独立性を持たせるために十分な時間が費やされた。

その他、教材執筆にあたっては、①文章は、なるべく専門用語を少くし、平易なものとなるよう配慮すること、②文体は「……である。」調とすること、③受講生の理解を深めるための参考文献等を最後の頁に記載することなどの配慮をした。

6. 学習指導の実施状況について

テレビ・ラジオ講座共に、学習指導の第1回目は、放送公開講座を開始する1週間前に開講式を含めて実施し、放送講座全体の概要説明を行った。

(テレビ講座)

学習指導の第2回から第4回(最終回、閉講式を含む)までの指導は、放送講座のパート終了ごとに実施した。実施の方法は、事前のアンケートで、放送講座を受講して「詳しく説明をして欲しいこと」や「質問及び特に興味があったこと」などを聞き、それに基づいて、はじめに講義形式の学習指導を行い、次いでその場で受講生からの質問に答える方法で各回とも2時間行った。また、終了後に、希望者に簡単な実験を行ったほか、施設見学をも実施した。

(ラジオ講座)

学習指導は、第1回目から第3回目まで特別講義を実施した。このほか、第1回目は前述のとおり概要説明を行い、第2回目からはテレビ講座と同様に事前のアンケートについての質問に答え、各回とも2時間行った。

7. 「大学教育の地域社会への開放」に果たす役割について

名古屋大学では、大学内で行われている研究と教育の成果を広く市民に公開し、地域社会の発展と大学における学問の進歩に寄与することを目的として、昭和44年から公開講座を続けてきたが、昭和60年度からテレビ放送公開講座、昭和61年度からラジオ放送公開講座の開講により、より広い地域のより多くの人々に最新の研究成果を公開することが可能になり、その対象も、家庭、企業、学生（学校）等と幅が広く今後の地域への活用による活性化が期待される。

8. 「大学の授業への活用」の状況と今後の可能性について

現在のところ、大学の授業への活用については未検討である。

9. 実施上の問題点と今後の問題等について

名古屋大学における放送公開講座は昭和60年度から始めたが、これまで特に視聴した学内者及び一般市民からの批判の声は聞かれず、むしろ実施についての積極的な意見等をいただいていることから成功していると思われる。しかし、実施上の問題点は次のとおりである。

- ① テレビ放送公開講座は総合大学の利点を生かして、人文・社会・自然科学の分野からの参加が可能な総合科目的な内容を実施しているが、専門領域が多様化して公開講座の一貫性などのため、主任講師相互及び副主任講師・講師の打合せに時間を多く費やされ、主任講師の負担が過重になっている。
- ② ラジオ放送公開講座は、テレビ放送公開講座とは、異なった分野で、ラジオ向けの内容で行うこととし、したがって、単独の部局に実施を依頼することとした。担当部局は負担が大きいとの意見も聞かれるので、実施部局の選出について更に検討が必要である。
- ③ 放送公開講座が実施されてから、途中でその実施をテレビまたはラジオで知ったと言った一般市民も多く、今後のPRを強化して一層の定着が望まれる。

(2) 科目担当主任講師の所見

(テレビ科目) ミクロの科学と人間生活

主任講師： 法学部教授 森 島 昭 夫

私は、テレビ公開講座の専門委員会委員長として本講座の企画のとりまとめを行うとともに、第8回および第13回の主任講師として講座の前半部分と全体とをそれぞれ総括する座談会の司会を勤めた。

本講座のねらいは、遺伝子工学、バイオテクノロジーなどのミクロの生化学および材料工学、半導体工学などのミクロの物理学を通じて、最先端のミクロの科学理論と技術研究を紹介しようとするものである。特に、名古屋大学におけるこれらの研究の現状を地域社会の人々に理解してもらうことを

目的としている。周知のように、生化学、材料工学などのミクロの技術と科学は最近20年足らずのうちに長足の進歩を遂げているが、現在どのような研究がなされているのか、新しい理論と技術によってこれまでの理論や技術で説明されていなかったことがどこまで明らかにされてきたのか、説明が進んでいない分野はどこか、そしてそれはなぜか、将来の展望はどのようなものか、という観点からさまざまな分野の専門家にミクロの世界にアプローチしてもらおうとした。講師の専門分野は、生化学、分子生物学、微生物学、細胞学、ウィルス学、金属物理学、半導体工学、応用化学など医学・工学・理学の多方面にわたっているが、さらに人文・社会科学分野からも参加して、高度先端科学に対する期待と課題とを検討した。多様な分野の、しかも高度な内容をもつ専門的な研究を13回という比較的少ない放送回数で紹介しようとしたために、講師の側にも濃密な内容の講義を強いることになり、また聴講者の側にも消化不良を起こし気味がないではないが、現代の再先端科学と技術を概観し、その基本的な考え方に触れるという意味では、かなりの程度の成果があったように思われる。聴講者から寄せられたアンケートからもこのことは明らかであるが、スクーリングのさいにも熱心な質疑がなされ、一般の人々の先端科学に対する関心の深さが印象づけられた。

講座の内容であるが、第1回から第8回までは、おおむね生物に関するミクロの科学が取り扱われた。第1回は細胞・微生物の構造を認識する手段としての顕微鏡の発達が紹介された。第2回と第3回は、「細胞のしくみと遺伝子のはたらき」「遺伝子工学と細胞工学」、第4回は、バイオテクノロジー、第5回は、「遺伝子と疾患」、第6回は、ウィルス、第7回は、「細胞の生理とマイクロテクニク」、そして、前半部分の総括として、第8回は、「バイオテクノロジーへの期待と不安」と題して、科学と倫理などの問題について各分野の（主任）講師に出いていただいて討論した。

後半は、物理的な側面からミクロの世界にアプローチした。第9回は、電子顕微鏡によって解明された結晶構造、第10回は非晶質材料を用いた「材料のニューフェイス」、第11回は超伝導体などの「未来材料へのチャレンジ」、第12回は「ICとマイクロエレクトロニクス」、そして最終回第13回は、「高度先端技術と人間生活」と題して、科学技術の将来と日本の科学技術について座談会形式で議論を行った。座談会形式を導入したのは、はじめての試みであったが、専門分野が異なる研究者が他分野で当然の前提とされていることについて新しい光をあて、聴講者と専門家との間を仲立ちする意味があったように思われる。

普段なじみのない新しい分野では、特に視覚に訴えて理解してもらうことが大切だが、TVのスタッフは各講師とよく連絡をとり、資料の収集、画像の構成に努力していただいた。

（ラジオ科目） 転換期の教育を考える

主任講師： 教育学部教授 堀内 守

今日の教育はさまざまな問題をかかえている。日々報じられるニュースを通して知るだけでも、さまざまな局面が見えてくる。

しかし、そういうさまざまなニュースがどのように取捨され、教育に関するまとまった像をつくり

あげていくかを調べると、意外な面もわかる。多くの情報は、「話題」にはなるが、教育に対する態度を変える力には作用していないという事態である。

こういう面を考慮し、この講座においては、視聴者の考えやイメージを揺り動かし、新しい教育像を多少なりともつくり出せるように工夫した。

昨年のラジオ公開講座のレポートを丹念に分析し直し、以上の4点に注意してテーマをまとめることにした。

- (1) テーマ全体がストーリーをなしているようにアレンジし、リズムや流れをつくる。
- (2) 各テーマは独立した話題としても聴くことのできるようにする。
- (3) ラジオという媒体の特性を考慮に入れ、講義のほか対談も加え、講義にはエピソードをかならず加える。
- (4) 講師の私的体験を盛り込み、話を身近なものにする。

このほか、テーマに現代性をもたせるため、身近なところで話題にされているところも取りあげた。要するに、歴史的・社会的なパースペクティブのなかでそれらをとらえ直すということがねらいである。

テキスト執筆に当たっては、以上の点を理解してもらい、主任講師がモデルを示した。

録音に際しても、各講師が相互に連絡をとり合って、どういう点に気をつけたらよいかを相談し合った。

スクーリングには、主任講師が常時出席して、講師の紹介、あとの司会、質疑の仲介等を兼ねた。これは、主任講師の役割として大切であるとの判断からであるが、結果は好評であった。

教育を「転換期」という観点からとらえ、新しい社会像や世界像と結びつけていくというねらいは、テキストにも反映され、テキストは講座が終わるとそのまま役割を終わるのではなく、さらに経験を組み入れて、新しいテキストとして他の方面に応用されていく。テキストの書き換えを目下考えているところである。

スクーリングの場においては、いろいろな質問が出された。多くは、講義の内容と関係があるが、そのほか、日頃から関心のある問題も「この場でぜひ訊ねたい」というように広がっていった。大学に来て学ぶという新鮮な経験が、「教育」という枠をはみ出したのである。こういうとき、答える側は「私の専門外なので」と逃げてはならない。自分の答えうる範囲で答える姿勢をとることが大切である。スクーリングの意味はこのあたりにあると思ったしだいである。

東海ラジオの担当者の方々もいろいろと知恵を貸してくださった。そのいくつかを記しておこう。

- (1) 講師の相手をするアナウンサーに質問役をになってもらい、講義の後半分をそれに充てることもあった。この方法は、かたくなりそうな話題をわかりやすく身近なものにするには有効である。
- (2) マイクの利用の仕方はワンパターンでなく、いろいろ微妙なところがある。位置、姿勢によって効果は異なる。

以上のようなところをあらかじめ説明してもらえたので、各講師はリラックスして語ることができた。

スクーリングの最終日まで、受講生のなかから自発的に出たこととして、受講生友の会の結成が実現した。今後、曲折はあるだろうが、こういう交流の動きが出たことは特筆すべきである。

最後に、関係者の方々にお礼を申しあげる。

制作報告

(1) 制作責任者報告(テレビ)

名古屋テレビ放送報道制作本部副本部長兼制作部長 乗松 要 作

1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

「基本的にはテキストに準拠する。但しメディアの違い、テキスト所有者が少数であることから、テキストと番組が相互補完的なものとする」という合意のもとに番組制作に入った。しかし放送が終了した現在、必ずしもそれが実現したとはいえない。

大学との協力関係については大変うまくいったと思う。ただ、出演講師が延べ57人と多いため打合せの時間調整に多大なエネルギーを費やした。特に夏休み、学会、海外出張という講師のスケジュールの間を縫う作業は至難の業であった。しかし秋が近づくにつれて作業はスムーズに行えるようになった。

大学以外の機関から映像資料を借用したが、公開講座の趣旨を良く理解してもらい助かった。

2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

基本構成は次のとおり。①オープニング②主任講師による狙いの説明③副主任講師の講義(副主任講師が3~5名の場合は必ず主任講師に橋渡しをしてもらった)④インターミッション(30秒)⑤副主任講師の講義⑥主任講師のまとめ⑦次回の予告。

番組の中にはできるだけ動く映像を使う、逆に説明をじっくり加える場合はフリップを多用した。昨年同様インターミッションを番組の中間に作ったが、今回は30秒とした。

3. 番組の視聴状況と成果(評価、反応)について

番組が始まって3回目の今回は、これまでの日曜6時~6時45分から土曜7時~7時45分に放送枠を移した。そのために視聴率から見れば明らかに向上した。

内容については専門的すぎて難しかったという感想は、前回と同様に聞かれた。しかし13回のうち前半8回は遺伝子工学を中心としたバイオサイエンスを、後半の5回は新素材を中心とした超ミクロの物質世界をテーマに、理学、農学、工学、医学、そして法学や倫理の側面から多角的に取り上げたことは、名古屋大学放送講座の特色として評価された。

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

まず出演講師の数の問題である。45分番組に講師が6人の場合もあった。1人5~10分の時間で、高度に専門的なことを如何にわかりやすく話すか — おのずと限界があった。

番組に出演する講師陣がやりやすく、視聴者にとってもおもしろい(わかりやすい)番組にする

かがスタッフのテーマである。その意味からいえばスタジオ録画が大変負担になる（極度の緊張を強いられる）講師も何人かおられたように思う。さればと録画場所を研究室に移すことも試みた。又、わかりやすく講義してもらおう事については映像ならではの利点をフルに使用したつもりである。もっとも講師のしゃべり言葉に関しては、個人差で如何とも仕様がなないケースもあった。

(2) 番組制作担当者の所見

(テレビ科目) ミクロの科学と人間生活

制作担当者： 名古屋テレビ放送報道制作本部主事 加 古 均

「ミクロの科学と人間生活」というテーマは、タイムリーでもあり非常に興味深く担当することができた。ただ、前半はバイオサイエンス、後半は超伝導など新素材が中心であったが、どちらも13回かけて講座を組むことが可能なテーマであるだけに、一部さらっと触れるにとどめなければならなかった点が残念である。

次に、実際に番組を制作する上で気づいた点につき、2、3記す。まずは、テレビに出演されるのは初めてという先生方も何人かいらっしまったが、あらかじめ、番組収録の手順や、その場の雰囲気などで説明申し上げていたのだが、やはり現実にカメラの前に立つと、緊張されて、普段の講義の調子が出せなかった先生もいらっしまった。各先生方非常に熱心に、ご家庭で奥さんを前にして、あるいは研究室の学生を前にリハーサルをされてくるのだが、やはり本番となるとちがうのだろうか。その辺、現場のディレクターとしてもう少し工夫できる面があったのではないかと反省している。

また、前年度の「水-人間とのかかわり-」では、座談会形式を採用しなかったが、今回、第8回に「バイオテクノロジーへの期待と不安」第13回に「高度先端技術と人間生活」と2回座談会があったが、講義の中では落ちてしまった問題点や、基本的なところを各分野の先生方に、ざっくばらんに話し合っていただけなのはよかったように思う。できれば、講座の一番はじめに、何故こういうテーマを取りあげたのか、私たちの暮しにミクロの科学がどうかかわっているのか、わかりやすく座談会形式でとりあげてもよかったように思える。それは、次年度以降にもいえることだが。

最後に、やはり出演講師の数はある程度しぼった方がよいのではないだろうか。45分の番組で、いろいろな先生が登場するのもある意味では変化があり、バラエティに富むのだろうが、放送講座という番組の性格上出演者によって話のトーンがあまり変ってしまうのも考えものだし、また、内容的にどうしても無理が出てくる恐れがある。

(1) 制作責任者報告（ラジオ）

東海ラジオ放送制作局局長待遇局次長 伊 藤 英太郎

1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

今回は教育学部の教授陣による「教育」をテーマにした「転換期の教育を考える」であったが、名古屋大学に於てはラジオ公開講座の内容決定については全て大学の責任において行うという基本方針があり、企画には放送局側は参画していないが、6月16日（土）に名古屋大学で行われたこの公開講座の学内シンポジウムに出席し傍聴した。尚、この時録音の方法などについて懇談した。

2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

前項でもふれているように、番組の企画・構成は全て名古屋大学が行っており、「タイトル」「13回の講座内容」「講師陣」など全て大学側で決定されている。今回も45分番組を1名（場合によっては2名）の講師による一人しゃべりをさけ、局の女性アナウンサーとのQ&A方式で行ったのが2回、子供の詩の朗読を女性アナウンサーがお手伝いしたのが1回あった。又、第3回の放送分のため、講師よりデンスケ借用の依頼があり、前後10日間ほど貸出し、このテープの素材編集を手伝った。

3. 番組の視聴状況と成果（評価、反応）について

第1回放送終了後、2～3人の人から、再放送ないしはテーププリントの要望があったが、いずれも無理であったため、おことわりし、大学が行っているスクーリングでの再聴取日程などを伝えて了解していただいた。又、やはり第1回放送終了後、問題児をかかえた母親（本人の言葉による）からも同様な申し入れがあったが、これも事情をお話して了解していただいた。その他、5回程放送が終ったところで西尾市の教育委員会からテープのプリントを購入したい旨の要望があったが、これも事情を話して了解していただいた。

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

録音開始前、番組構成の方法などについてさらに聴き易い方法が得られるよう十分な打合せをするなど、改善して行きたい。

また、放送開始後、要望の多いテキスト購入についての途も開けたい。

(2) 番組制作担当者の所見

(ラジオ科目) 転換期の教育を考える

制作担当者： 東海ラジオ放送制作局局長待遇局次長 伊藤 英太郎

昨年「健康」をテーマにした「健康づくりの科学」につづいて、第2回の今回の「転換期の教育を考える」は「教育」の問題がテーマであったため、聴取者の関心も高く、番組の聴取率を上げる上でありがたいことであった。(尚、第3回は「経済」をテーマにした「東海の企業と経済」であり、これも大いに期待される)

これは、第1回の放送終了後、再放送やテープ再聴取及びプリントを要望する電話が局に入ったことでも伺える。又、西尾市の教育委員会からテープ購入の申し入れがあるなど「教育」に関する関心や充実した内容についての反響が高かった。

講座の概要

〈科目の概要〉

科目名	科目のねらい	内 容 ・ 方 法
ミクロの科学と人間生活 (テレビ)	名古屋大学では、大学における研究・教育を広く地域社会に公開し、大学と地域社会との交流を通して、地域社会の発展と大学における学術研究の進歩とに資することを目的として、昭和60年度より「科学と人間」を基本テーマとして放送公開講座を実施してきた。本年度は、強い社会的要請のもとに、学際的研究が急速に進展しつつあるミクロの科学に関連して、「ミクロの科学と人間生活」を大テーマとして選定した。	<p>宇宙、天体を眺めることから出発したガリレオの望遠鏡は、一方では顕微鏡という形で、小さな物体を観察する方向へも進み、ミクロの世界を次々と明らかにして来た。人類への最初の貢献は病原となる微生物への探究であり挑戦であった。一方、生体を構成する細胞の構造が調べられ、内部の微細な構成要素に至るまで、形態的な面のみでなく、機能的なしくみの解明が行われつつある。細胞によって構成される固体は、生命という生物の本源的属性を内蔵し、美しい調和を保った形態を作り上げている。細胞そのものやその総和である固体は遺伝子によって継代されている。近年、遺伝子の本体を解明する道がひらかれたことにより、生命のしくみについてのわれわれの理解は飛躍的に発展した。さらに、この新しい生命科学は、バイオテクノロジーとしての応用面を広げ人類に恩恵をもたらしているが、他方で生命に対する人工的な操作は、科学と倫理という新しい問題をわれわれに提起している。</p> <p>また、微細構造に分解し、目で眺めるという手段は生体以外の物質の世界においても広がり、結晶構造、分子構造などの解明がすすんだ。物質のもつ未知の性質の発見とその制御によって、優れた機能を備えた新素材の創造と活用が次々と可能となり、エレクトロニクスにおける集積回路とその生産技術などに見られるように、ミクロの世界は技術分野にもはてしなく広がっている。これらの技術は、われわれの日常生活の中に既に深く入り込んでおり、その生活様式まで変えようとしている。</p> <p>このように、生命科学やミクロ物質科学と人間生活とのかかわりは、今後一層密接になることが予想される。しかし、その効率のよさ、便利さのみに目を奪われていると、ときとして人知を越えた悲惨な結果をもたらさないとも限らない。</p> <p>本講座は、関連した研究の現状を出発点として、人間生活と自然との調和のとれた高度技術の発展はどうあるべきかを考えようとするものである。</p>
転換期の教育を考える (ラジオ)	今日の教育は複雑な問題をかかえている。日々報じられるニュースを通して知るだけでもさまざまな局面が見えてくる。教育の構造は大きく変わりつつある。教育の範囲は広がり、激しく変化している。過去の経験に頼って今日の教育を判断しようとしても、その間のズレが大きいため、カラまわりをしてしまうようなこともある。日々のニュースは、日常の世界のなかに「競争」や「選抜」から「体罰」や「暴力」にいたる「異常な」できごとをニュースとしてもち込む。それらだけを見ていると、今日の教育は、あたかも苛々のし通しで、ドギつく、また無責任になっているとしか見えてこないだろう。それは、今日の教育のある側面を表わしていることは否めないが、それが全体であると思えば、今日の教育の全体を見る方法も、意志も弱まってしまう。今日必要なのは、教育の全体を冷静に見抜く目であり、	

科目名	目のねらい内容・方法
転換期の教育を考える (ラジオ)	<p>教育の変化のなかで見つめようとする心であろう。</p> <p>私たちは、現代の教育の中心と周辺に目くばりをしながら、教育のはたらきや意義がどのように変わってきたか、そして今後どのように変わっていくかを明らかにしたいと思う。この講座では、まず具体例から入っていき、それを多方面から解き明かしてみたい。その過程で、今日の教育の姿やはたらきが浮き彫りにされるようにし、教育の新しい可能性を切りひらき、しなやかな発想と大いなる希望を手に入れたいとねがっている。</p>

<各科目の構成>

(テレビ科目) ミクロの科学と人間生活

主任講師：法学部 教授 森 島 昭 夫

放送回	放送月日	中心テーマ	担当講師
第 1 回	10月 3日	ミクロの世界の幕開け	工学部教授 井 村 徹 医学部教授 星 野 宗 光 " 教授 星 野 洸 " 附属病態制御研究施設教授 田 中 健 治
第 2 回	10月10日	細胞のしくみと遺伝子のはたらき	理学部教授 堀 田 康 雄 " 助教授 伊 藤 道 夫 " 附属臨海実験所助教授 黒 田 英 世
第 3 回	10月17日	遺伝子工学と細胞工学	農学部教授 水 島 昭 二 " 助教授 中 村 研 三 " 助教授 水 野 猛 " 助教授 塚 越 規 弘
第 4 回	10月24日	ミクロのバイオテクノロジー	"
第 5 回	10月31日	遺伝子と疾患	医学部附属病態制御研究施設教授 吉 田 松 年 医学部教授 小 沢 高 将 " 教授 斎 藤 英 彦 愛知県心身障害者コロニー研究所 生化部長 小 笠 原 信 明 愛知県がんセンター研究所研究員 高 橋 雅 英

放送回	放送月日	中心テーマ	担当講師
第 6 回	11月 7日	微生物とのたたかい	医学部附属病態制御研究施設教授 永井美之夫 医学部教授 加藤延夫 医学部附属病態制御研究施設教授 田中健治文 医学部附属病院教授 北沢式
第 7 回	11月14日	細胞の生理とマイクロテクニク	環境医学研究所教授 渡辺 悟雄 医学部教授 富田 忠明 環境医学研究所教授 間野 忠治 " 教授 外山 淳一 医学部講師 磯部 健枝 環境医学研究所講師 水村 和
第 8 回	11月21日	バイオテクノロジーへの期待と不安	工学部教授 井村 徹弘 " 教授 美浜 和 " 教授 芦田 玉 " 助教授 坂 公 恭
第 9 回	11月28日	超ミクロの物質世界	法学部教授 森島 昭夫 教育学部教授 佐々木 亨 農学部教授 鶴高 重三 理学部教授 堀田 康雄 医学部附属病態制御研究施設教授 吉田 松年
第 10 回	12月 5日	材料のニューフェイス -その構造と物性-	工学部教授 井村 徹一 " 教授 平野 真三 " 教授 細井 祐 " 助教授 松井 正 頭
第 11 回	12月12日	未来材料へのチャレンジ	工学部教授 井村 徹男 " 教授 堂山 昌一郎 " 教授 野田 公伸 " 助教授 坂田 公伸 理学部講師 和田 伸彦
第 12 回	12月19日	IC化の時代	工学部教授 井村 徹勇 " 教授 赤崎 幸夫 " 教授 安田 幸夫 " 教授 早川 尚夫
第 13 回	12月26日	高度先端技術と人間生活	法学部教授 森島 昭夫 教育学部教授 佐々木 亨 医学部附属病態制御研究施設教授 永井美之夫 工学部教授 井村 徹二 農学部教授 水島 昭

(ラジオ科目) 転換期の教育を考える

主任講師：教育学部 教授 堀内 守

放送回	放送月日	中心テーマ	担当講師
第1回	10月3日	「教育問題」と問い方	教育学部教授 堀内 守
第2回	10月10日	教育からマンガ消えた？	教育学部教授 江藤 恭二
第3回	10月17日	変質する子ども文化	教育学部助教授 今津 孝次郎
第4回	10月24日	「変わるライフサイクル」	教育学部教授 教育学部助教授 田村 畑上 治隆
第5回	10月31日	学校のはたらき(1) -授業のウチとソト-	教育学部教授 日比 裕
第6回	11月7日	学校のはたらき(2) -多様化と画一化-	教育学部教授 佐々木 亨
第7回	11月14日	「学歴」の変動相場	教育学部長 潮木 守一
第8回	11月21日	教育制度の争点	教育学部助教授 榊 達雄
第9回	11月28日	教育の「機会」は広がる	教育学部教授 小川 利夫
第10回	12月5日	肥大する教育産業	教育学部助教授 森下一 期
第11回	12月12日	生涯学習の波動	教育学部助教授 新海 英行
第12回	12月19日	国際化時代の教育	教育学部助教授 " 助教授 馬早 越川 徹操
第13回	12月26日	(まとめ) 新しい教育像を求めて	教育学部教授 堀内 守

名古屋大学

<スクーリング>

(テレビ科目) ミクロの科学と人間生活

回数	実施場所	実施日時	備考
第1回	名古屋大学経済学部 第2講義室	昭和62年 9月26日(土) 15:30~17:30	第1回には開講式、第4回には閉講式を兼ねる。
第2回		昭和62年10月31日(土) 13:30~15:30	
第3回		昭和62年11月28日(土) 13:30~15:30	
第4回		昭和63年 1月 9日(土) 13:30~16:00	

(ラジオ科目) 転換期の教育を考える

回数	実施場所	実施日時	備考
第1回	名古屋大学経済学部 第2講義室	昭和62年 9月26日(土) 13:00~15:00	第1回には開講式、第3回には閉講式を兼ねる。
第2回		昭和62年11月21日(土) 14:45~16:45	
第3回		昭和62年12月26日(土) 14:00~16:30	

<再視聴>

(テレビ科目) ミクロの科学と人間生活

実施場所	実施日時等
名古屋大学 本部第5会議室 (2号館、地階)	昭和62年10月31日(土) 9:00~12:00 (第1回~第4回放送分)
	昭和62年11月28日(土) 9:00~12:00 (第5回~第8回放送分)
	昭和63年 1月 9日(土) 9:00~12:45 (第9回~第13回放送分)

(ラジオ科目) 転換期の教育を考える

実施場所	実施日時等
名古屋大学 本部第5会議室 (2号館、地階)	昭和62年11月21日(土) 9:00~14:15 (第1回~第7回放送分)
	昭和62年12月26日(土) 9:00~13:30 (第8回~第13回放送分)